

「変動する大地」と保全活動



武川正人・田仁孝志・畑吉晃・北越美紀子・中谷麻美（洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会事務局）

1. 洞爺湖有珠山ジオパークの概要

洞爺湖有珠山ジオパークは、北海道の南西部にある伊達市・豊浦町・壮瞥町・洞爺湖町の4市町全域、面積は1,180km²である。人口は約51,000人。

周囲約43kmの洞爺湖は、約11万年前におきた日本列島最大級の巨大噴火によって誕生したカルデラ湖である。有珠山は約2万年～1万年前に洞爺湖南岸に誕生した。

有珠山は8000年程前に山体崩壊を起こして以降、噴火を休止していたが、江戸時代から再び活動を始め、20世紀に4回の噴火を起こしている。

有珠山を中心に数十年おきにくりかえす噴火活動は、近接した洞爺湖温泉や壮瞥温泉で多くの断層をつくり、道路や建造物を破壊した。

洞爺湖有珠山ジオパークでは、これらの建造物や道路を含む「ジオパークのみどころ」をジオサイトに指定し「大地の変動」を観察できるように保全している。

2. 「変動する大地」と植生の回復

2000年の有珠山噴火では、山麓に60か所以上の噴火口ができた。火山灰の降灰と熱泥流の発生、地熱の影響によって、火口周辺の植物はほぼゼロになった。

噴火活動が終息した後、火山灰や泥流の被害を受けた道路・建築物の一部は、噴火災害の学習素材として保存され、それらを見学できる「西山山麓火口散策路」「金比羅火口災害遺構散策路」が設けられた。見学者の安全な通行を確保するため、通路部分はアスファルトや木道を敷いている。これは見学者の安全を確保すると同時に、通路部以外の場所が踏み荒らされないうように保護する役目もある。現在、噴火から15年の時間の経過とともに植生が回復、火山灰が露出していた場所にも草木が生い茂り、散策路から災害遺構が見づらくなっていった。

金比羅火口災害遺構散策路
平成17（2005）年



金比羅火口災害遺構散策路
平成27（2015）年



3. 「保全」とは？

ジオパークにおける、「ジオサイトの保全」とは何か？

野外にあるジオサイトは、風雨や積雪、気温差や植生の回復等により、日々変化を続けている。その変化がジオサイトの意味を損なってしまうこともある。

災害遺構が防災・減災の学習素材として役割を果たすためには、野外展示物として適正な景観を保つだけでなく、その場で「何を」「どう見せる（伝える）か」を精査する必要がある。見せたいものによって保存方法が異なるからである。洞爺湖有珠山ジオパークでの例を挙げると「時間の経過を見せたい場所」では、一部区画をあえて除草せずに植生回復エリアとして表示している。一方「大地の変化を見せたい場所」であるグラーベン（谷）は、可能な限り除草を行っている。

ジオサイトの保存方針を決めるために、学識顧問や環境省※、行政担当部局等関係者と調整を行っている。

※支庁洞爺国立公園内の規制を受けるジオサイトの保全に当たっては、環境省の許可を得て行っている。

図1 ジオサイト保全事業の流れ



現状調査／整備方針の確認

- ・協議会学識顧問
- ・環境省自然保護官
- ・行政担当部局
- ・ジオ協議会事務局



伐採申請／許可

- ・行政担当部局
- ・環境省自然保護官
- ・ジオ協議会事務局



作業実施

- ・住民団体
- ・行政担当部局
- ・ジオ協議会事務局

4. ジオサイト保全事業の実施

旧とうやこ幼稚園



園庭に落ちた噴石が見えるようになった

金比羅火口（有くん火口）



火口縁が見えるようになった

西山山麓火口散策路



グラーベンの段差がすっきり

ドンコロ山



火山噴出物の層が見えるようになった

洞爺湖有珠山ジオパークでは、植生の回復が著しい数か所のジオサイトにおいて、環境省と住民団体の協力を得ながら、樹木伐採と下草の除草を行った。

その結果、2000年噴火で落下してきた噴石が見えるようになり、火口の近くでは散策路から火口の縁がはっきりと目視できるようになった。

このように議論が尽くされ、保全方針が決まると、地元住民団体が保全活動を行う場合もある。ドンコロ山などでは、毎年住民団体の自主的な呼びかけで、整備事業が行われている。地域住民がジオサイトの価値を知り、その保全につとめる理想の保全事業といえるだろう。

ジオサイトの保全とは、単に「手をつけずに放っておく」のではなく、大地のストーリーを効果的に伝えるために「適正な方法によって維持管理する」ことである。